「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

非常勤講師　浅井康吏

私と専攻科との出会いは、早 20 数年前に遡ります。初めて出会った場所は、当時勤務しておりました、特養でした。その時の事は、今でもはっきりと覚えております。まだ、介護福祉士として数年目ではありましたが、実習生を教える立場でもありました。

第一期生を担当してから、その後も携わらせて頂きましたが、総称して言えることは、「個」はあるものの、皆が介護福祉士を目指す上で、とても前向きであり、勤勉であり、素直である事を感じました。これは、私のように専門学校で二年間学んだ者と、短期大学を卒業後に、新たな「志」を抱き、一年多く学んだ者との違いが明確であり、意欲の差と申しますか、精神的なゆとりさえ感じました。又、専攻科の教授が私も大変お世話になった事のある、恩師「大林教授」であった事も、親近感を覚え、運命をも感じました。

さて、月日の過ぎるのは早いもので、それから約 20 年が経過しようとしております。以前は一介護福祉士としての立場であった私も、勤務する法人も変わり、一事業所の事業長を任せられる立場に変わりました。

先の社福を退職した後、しばらくの間、大林教授と疎遠になった時期もありましたが、平成 28 年よりひょんな事から再開できました。その時の思いは、「先生昨日もお会いしましたか？」と勘違いするほど近くに感じました。（笑）

その様な事から、今度は事業長として専攻科の学生を迎え入れる立場となりました。それも幾期生共、私が実際に担当していた頃と全く変わりなく、皆がしっかり教育されており、改めて嬉しく感じました。

その一部の学生は、現在私の直属の部下でもあります。一生懸命熱意を伝え教育した学生が、私たちに共感し、共に過ごすという事は、何故にも変えられない嬉しさであると感じております。

さらに、平成 30 年度からは、思ってもみなかった、教員となりました。様々な立場で、各学生を見てきた中でも、やはり「しっかりしている」事は変わりなく、皆が「一人の大人」として立ち居振る舞いが出来ておりますし、私自身も、教育者としての立場で関わる事が、人生の成長に繋がっているのではないかと感じており、その位大切な時間でした。

しかし、この期を持ち閉科となると伺いました。短期大学卒業後に介護福祉士が取得できる学校がなくなってしまう事、それに合わせ、素晴らしい学生達を生み出した貴学の教育体制、それらが失われていくという事、それは、とても残念で、寂しさを覚えます。

最後にはなりますが、専攻科福祉専攻を卒業されたすべての学生と在学中の皆様がこの後の日本の福祉を盛り上げて頂くことを切に望むと共に、益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

さようならは言いません。どうもありがとう。またお会いしましょう。